

骨スキャン及び ^{67}Ga スキャンが診断に有用であった 早期胃癌の播種性骨髄転移の1例

中島 鉄夫 小鳥 輝男 前田 尚利
松下 照雄 佐々木欣也*

要 旨

6年前早期胃癌で胃亜全摘をうけた59歳男性が腰痛を主訴として来院。外来時の腰椎単純X線像はosteoblasticな像を呈し、末血像に幼若細胞の出現をみた。入院後の骨スキャンは、所謂 beautiful bone scan を呈し、 ^{67}Ga スキャンもほぼ同様な所見であった。骨髄生検により、印環細胞が証明され、胃癌の播種性骨髄転移の診断がなされた。

はじめに

癌の骨・骨髄転移は巣状、多発性に來ることが多いが、赤色髄の分布に一致して、び慢性に転移を來す症例のあることが知られている。今回われわれは、早期胃癌術後6年を経て、腰痛をきっかけとしてこの型の転移が発見された1例を経験したので若干の考察を加えて報告する。

症例説明

59歳男性。昭和61年1月腰痛出現、徐々に増強するため、3月福井医大一内受診し、同20日入院。昭和55年6月胃切除術(早期胃癌、組織型不明)の既往があるが、家族歴には特記すべきことはない。

検査成績では、末血に幼若細胞が出現し、血中LDH著増(695 IU/ml)同ALP著増(2,379 IU/ml)特にII, III分画の増加を認めた。CEAは正常範囲内であった。

画像診断上のポイント

外来時の腰椎単純X線像(Fig.1)では、椎体は

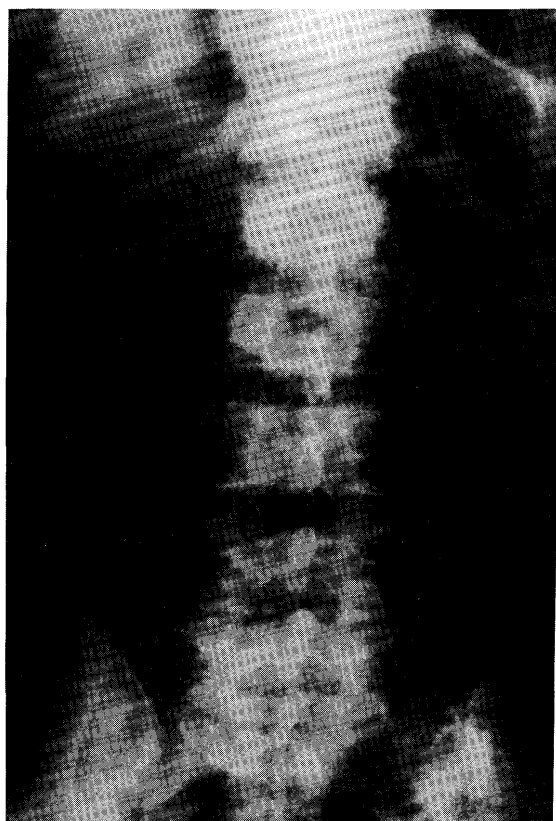


Fig. 1 Plain X-ray film of lumbar spine. Osteoblastic spines without significant osteolytic foci are seen.

全体に osteoblastic であるが、明らかな圧迫骨折等は認めない。

入院後引きつづいて行われた骨スキャン像(Fig. 2)では、 $L_4 \sim L_5$ に周辺がやや hot な photopenic

A case with disseminated bone metastases from early gastric gastric cancer in which bone scan and ^{67}Ga scan were useful.

Tetsuo Nakashima, Teruo Odori, Hisatoshi Maeda, Teruo Matsushita, Kinya Sasaki*.

Departments of Radiology and *the First Internal Medicine, Fukui Medical School.

福井医科大学放射線科, *同 第一内科 〒910-11 福井県吉田郡松岡町下合月23-1



Fig. 2 ^{99m}Tc -MDP bone scintigrams show so called "beautiful bone scan" with "absent kidney sign".

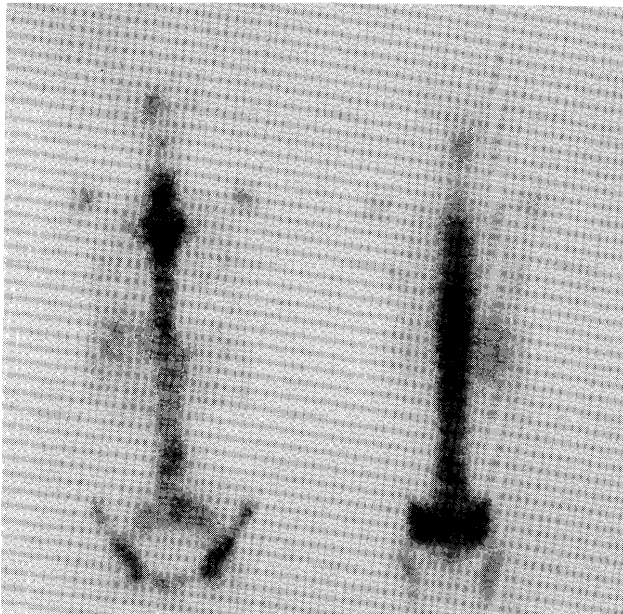


Fig. 3 ^{67}Ga scintigrams show quite similar tracer distribution to the bone scintigrams.

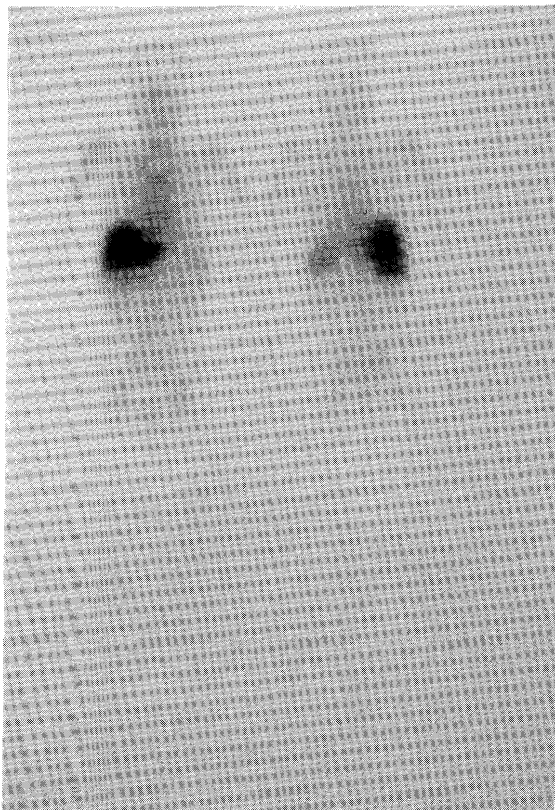


Fig. 4 ^{111}In bone marrow scintigrams show generalized decrease in bone marrow activity with peripheral extension. Increased accumulation to liver and spleen was also noted.

area を認める他は、局所的な強い集積は認められず、四肢骨を除き全身の骨が非常に明瞭に描画され、かつ腎の描画がほとんど認められなかった。 ^{67}Ga 腫瘍スキャン (Fig. 3) でも骨スキャンとほぼ同様の RI 分布を示した。 ^{111}In 骨髄スキャン (Fig. 4) においては、骨髄への RI 集積は弱い、全体として末梢への extension 傾向を示し、肝脾への RI 集積の亢進を認めた。

以上の臨床、画像情報よりこの症例は、既往の早

期胃癌の再発、全身骨髄へのび慢性播種性転移を来したものと考えられた。

引きつづいて行われた骨髄穿刺は dry tap であったため、腸骨陵より骨髄生検が施行され、signet ring cell と線維成分の増生を認め、胃癌の骨髄転移の診断が確定した。なお、上部消化管透視では、癌の再発の所見は認められなかった。

考案

癌の骨、骨髄転移は通常 multifocal に来る場合が多いが、本例のように全身の骨髄にび慢性、播種性に転移を来す場合があることが報告されている。このタイプの転移を有する癌では、原発巣の如何にかかわらず、出血傾向により早期に死の転帰をとることが多い。胃癌の骨転移については従来その頻度は低いとされてきたが、たとえ早期癌であっても、このタイプの骨転移を念頭において検索を進めることが望ましいと思われる。またこの際、骨スキャンと ^{67}Ga スキャンを併用することが、有力な診断手技になると考える。

文 献

- 1) 前山 巖: 剖検例における癌の骨転移の頻度. 整形外科 **20**: 1105—1114, 1969.
- 2) 林 英夫ほか: 播種性骨髄癌症—転移癌の 1 病型としての考察ならびに microangiopathic hemolytic anemia または, disseminated intravascular coagulation との関連について—, 癌の臨床 **25**: 329—343, 1979.
- 3) 武内令子ほか: 胃癌術後 12 年目に発症した microangiopathic hemolytic anemia (MHA)—Disseminated intravascular coagulation (DIC) 併発骨髄癌腫症. 臨床血液 **24**: 1423—1429, 1983.
- 4) 神谷知至ほか: 胃癌の転移による播種性骨髄癌症の臨床病理学的検討. 癌の臨床 **31**: 819—826, 1985.
- 5) Scott A et al: Diffuse sclerotic skeletal metastasis as an initial feature of gastric carcinoma. Arch Intern Med **140**: 1666—1668, 1980.
- 6) 瀬戸幹人ほか: 胃癌の骨転移—骨シンチグラフィによる臨床的検討—. 核医学 **20**: 795—801, 1983.